

Sun. Jul 9, 2017

ROOM 2

Free Paper Oral(multiple job category) | 社会・家族支援・スタッフ教育

Free Paper Oral (multiple job category) 5 (III-TRO5)

Chair:Noriko Nakazawa(Nursing unit .Mt.Fuji Shizuoka Children Hospital)

8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2 (Exhibition and Event Hall Room 2)

[III-TRO5-01] 第2回フォンタン術後の患者・家族会開催報告～患者・家族のニーズを知る～

○石川 さやか¹, 藤井 美香², 堀口 佳菜子¹, 池田 健太郎³, 小林 富男³, 福島 富美子², 都丸 八重子², 小谷 弥生², 熊丸 めぐみ⁴ (1.群馬県立小児医療センター 外来, 2.群馬県立小児医療センター 病棟, 3.群馬県立小児医療センター 循環器科, 4.群馬県立小児医療センター リハビリテーション課)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-02] フォンタン手術を受けた患者と家族の全国応援活動「フォンタンの会」開催報告

○吉田 佳織¹, 権守 礼美², 森脇 弘子³, 城戸 佐知子⁴, 麻生 俊英⁵, 岸本 英文⁶ (1.大阪府立母子保健総合医療センター 看護部, 2.神奈川県立こども医療センター 看護局, 3.市立豊中病院 看護部, 4.兵庫県立こども病院 循環器内科, 5.神奈川県立こども医療センター 心臓血管外科, 6.元母子医療センター 心臓血管外科)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-03] 児童に対する効果的な心肺蘇生教育方法の検討

○飯沼 由紀子¹, 勝又 庸行², 小泉 敬一³, 小鹿 学⁴, 杉田 完爾³, 星合 美奈子³ (1.甲府病院 看護部, 2.甲府病院 小児科, 3.山梨大学医学部 小児科, 4.富士吉田市立病院 小児科)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-04] 循環器系混合病棟の小児患者を受け持つ看護師の抱える不安

○石井 里美, 大久保 三和子, 石井 真寿美 (千葉県循環器病センター 看護局)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-05] 小児循環器看護における継続教育への一考察—新人研修においてペーパーパイシエント型シナリオトレーニングを実施して—

○笹川 みちる, 松室 有希 (国立循環器病研究センター 看護部)

8:30 AM - 9:20 AM

Free Paper Oral(multiple job category) | 心理・プレパレーション

Free Paper Oral (multiple job category) 6 (III-TRO6)

Chair:Masako Aoki(Musashino University, Faculty of Nursing)

9:20 AM - 10:20 AM ROOM 2 (Exhibition and Event Hall Room 2)

[III-TRO6-01] 心臓移植に伴う転院における心理社会的視点での情報共有

○作田 和代 (静岡県立こども病院 成育支援室)

9:20 AM - 10:20 AM

[III-TRO6-03] 植込み型除細動器植込み手術を受ける患児に対する子ども療養支援士の役割

○割田 陽子¹, 朝海 廣子², 阿部 真奈美¹, 荒木田 昭子¹, 白神 一博², 進藤 考洋², 平田 陽一郎², 犬塚 亮², 平田 康隆³, 本田 京子¹, 岡 明² (1.東京大学医学部附属病院 看護部, 2.東京大学医学部附属病院 小児科, 3.東京大学医学部附属病院 心臓外科)

9:20 AM - 10:20 AM

[III-TRO6-04] 重症心不全患児への Child Life

Specialistによる介入とその成果—補助人工心臓装着から移植、移植後の関わりを行った1症例—

○田村 まどか¹, 坂口 平馬², 福山 緑², 白石 公², 市川 肇³, 坪井 志穂^{1,4}, 堀 由美子^{1,4}, 勝原 寛子⁴, 鎌田 将星⁵, 福嶋 教偉¹ (1.国立循環器病研究センター 移植医療部, 2.国立循環器病研究センター 小児循環器科, 3.国立循環器病研究センター 小児心臓外科, 4.国立循環器病研究センター 看護部, 5.国立循環器病研究センター 脳血管リハビリテーション科)

9:20 AM - 10:20 AM

[III-TRO6-05] 循環器病棟でのファシリテイドッグの活動を看護の視点から振り返る

○加藤 水希 (静岡県立こども病院 看護部 循環器病棟)

9:20 AM - 10:20 AM

Free Paper Oral(multiple job category) | 社会・家族支援・スタッフ教育

Free Paper Oral (multiple job category) 5 (III-TRO5)

Chair:Noriko Nakazawa(Nursing unit .Mt.Fuji Shizuoka Children Hospital)

Sun. Jul 9, 2017 8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2 (Exhibition and Event Hall Room 2)

[III-TRO5-01] 第2回フォンタン術後の患者・家族会開催報告～患者・家族のニーズを知る～

○石川 さやか¹, 藤井 美香², 堀口 佳菜子¹, 池田 健太郎³, 小林 富男³, 福島 富美子², 都丸 八重子², 小谷 弥生², 熊丸 めぐみ⁴ (1.群馬県立小児医療センター 外来, 2.群馬県立小児医療センター 病棟, 3.群馬県立小児医療センター 循環器科, 4.群馬県立小児医療センター リハビリテーション課)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-02] フォンタン手術を受けた患者と家族の全国応援活動「フォンタンの会」開催報告

○吉田 佳織¹, 権守 礼美², 森脇 弘子³, 城戸 佐知子⁴, 麻生 俊英⁵, 岸本 英文⁶ (1.大阪府立母子保健総合医療センター 看護部, 2.神奈川県立こども医療センター 看護局, 3.市立豊中病院 看護部, 4.兵庫県立こども病院 循環器内科, 5.神奈川県立こども医療センター 心臓血管外科, 6.元母子医療センター 心臓血管外科)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-03] 児童に対する効果的な心肺蘇生教育方法の検討

○飯沼 由紀子¹, 勝又 庸行², 小泉 敬一³, 小鹿 学⁴, 杉田 完爾³, 星合 美奈子³ (1.甲府病院 看護部, 2.甲府病院 小児科, 3.山梨大学医学部 小児科, 4.富士吉田市立病院 小児科)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-04] 循環器系混合病棟の小児患者を受け持つ看護師の抱える不安

○石井 里美, 大久保 三和子, 石井 真寿美 (千葉県循環器病センター 看護局)

8:30 AM - 9:20 AM

[III-TRO5-05] 小児循環器看護における継続教育への一考察 ―新人研修においてペーパーペイシェント型シナリオトレーニングを実施して―

○笹川 みちる, 松室 有希 (国立循環器病研究センター 看護部)

8:30 AM - 9:20 AM

8:30 AM - 9:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2)

[III-TRO5-01] 第2回フォンタン術後の患者・家族会開催報告～患者・家族のニーズを知る～

○石川 さやか¹, 藤井 美香², 堀口 佳菜子¹, 池田 健太郎³, 小林 富男³, 福島 富美子², 都丸 八重子², 小谷 弥生², 熊丸 めぐみ⁴ (1.群馬県立小児医療センター 外来, 2.群馬県立小児医療センター 病棟, 3.群馬県立小児医療センター 循環器科, 4.群馬県立小児医療センター リハビリテーション課)

Keywords: フォンタン手術, 交流会, 移行期支援

【背景】 A病院では成人移行期支援外来に加え、平成27年から年に1回、フォンタン術後の患者・家族会を開催している。【目的】患者・家族会を開催しアンケートを実施することで、患者と家族の移行期支援外来や集団患者教育に対するニーズを明らかにする。【対象と方法】患者・家族会に参加した A病院通院中の4歳以上の患者を持つ20家族を対象とした。主に家族を対象としたプログラムでは移行期支援外来の説明、フォンタン術後の社会人及び大学生による体験談、兄弟の体験談、成人領域循環器外来と医師の紹介、座談会を実施した。もう一方では、患者本人を対象とし、運動療法を兼ねた体操、診察室の模擬体験、身体についてのクイズを実施した。会終了時に無記名方式で家族及び家族と同じプログラムに参加した患者にアンケート1を実施した。後日、会終了後の心境の変化と会や移行期支援に対する要望を聞いたアンケート2を郵送により行い検討した。以上は院内倫理審査委員会で承認を得た。【結果】本人の体験談、兄弟の体験談について、「良かった」と答えた家族が86%と特に高かった。心境の変化と会や移行期支援への要望について、1) 病気について2) 就学・学校について3) 将来について4) 成人病院への移行について5) その他の5つにカテゴリー化することができた。会に参加することで改めて自己の疾患について家族で話し合う機会となっていたが、加えて様々な不安の記載も多くあった。自由記載では、会自体が情報共有や交流の場となっているとの回答が多かった。【考察】会の内容について満足度は高かったが、家族は将来についての不安を抱えていることが分かった。このことから体験談や座談会から得られる情報や、家族同士での情報交換が、不安の解消や問題解決となるのではないかと考える。【結語】患者家族のニーズを反映させ、会の更なる充実と患者支援につなげていきたい。

8:30 AM - 9:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2)

[III-TRO5-02] フォンタン手術を受けた患者と家族の全国応援活動 「フォンタンの会」開催報告

○吉田 佳織¹, 権守 礼美², 森脇 弘子³, 城戸 佐知子⁴, 麻生 俊英⁵, 岸本 英文⁶ (1.大阪府立母子保健総合医療センター 看護部, 2.神奈川県立こども医療センター 看護局, 3.市立豊中病院 看護部, 4.兵庫県立こども病院 循環器内科, 5.神奈川県立こども医療センター 心臓血管外科, 6.元母子医療センター 心臓血管外科)

Keywords: フォンタン手術, 患者, 支援

【背景】フォンタン手術は単心室を含む複雑心疾患に対する機能的修復術であり、手術後の患者や家族は予期せぬ事態に不安を抱いて過度の運動制限を課し、消極的に過ごしていることも少なくない。また、就職・妊娠・出産などに不安を抱いているとされている。そこで2011年より、フォンタン手術後の患者と家族の応援をすることを共通の目的とした複数施設の医師・看護師、そして患者が協働して「フォンタンの会」を各地で開催している。【開催目的】フォンタン手術を受けた全国の患者と家族を対象に、教育・交流を目的とした交流会を開催し、「何ができない」ではなく、「何ができる」「こうすればできる」という視点で支援すること。【開催内容】内容は主に、(1) 医師による病気やフォンタン循環の説明と適度な運動についての講義 (2) 看護師による成長や自己管理についての講義 (3) 患者や家族からのお話 (4) キッズヨガであり、各地の医師や患者会が中心となり開催している。【結果・考察】2011年から6年間で、大阪・神奈川・愛媛・広島・長野・鹿児島・金沢・岩手の全国8か所での開催を終えた。毎回100名前後の患者と家族の参加があり、活発な意見交換が行われ

た。家族からは「制限をするのではなく、限界を本人が知ることが大切」などの感想が得られた。また、患者と家族が病気について話す機会が増えたという調査結果も得られており、会が子どもや家族の学びや交流の場になっていた。マイペースで参加できるキッズヨガには、在宅酸素使用中の患者も皆と一緒に参加し、「自分に可能な運動」を知ることができていた。フォントンの会の開催をきっかけに、継続的に取り組みを行っている施設もでてきている。【おわりに】今後も会の開催を継続し、施設という壁を超えて全国の患者や家族が前向きに病気と向き合える支援を検討していきたい。

8:30 AM - 9:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2)

[III-TRO5-03] 児童に対する効果的な心肺蘇生教育方法の検討

○飯沼 由紀子¹, 勝又 庸行², 小泉 敬一³, 小鹿 学⁴, 杉田 完爾³, 星合 美奈子³ (1.甲府病院 看護部, 2.甲府病院 小児科, 3.山梨大学医学部 小児科, 4.富士吉田市立病院 小児科)

Keywords: 一次救命処置, AED, 突然死

【背景】クラブ活動中に起こる児童・生徒突然死を防ぐためには、児童が by stander CPRの技術を身に着ける必要がある。我々は、2015年から「山梨県における児童・生徒突然死ゼロ」を目指し、児童に心肺蘇生を指導する市民講座を2回開催した。昨年の本学会において、小学校低学年は正確に心肺蘇生を行うことができることを報告した。【目的】児童が集中して講義を受講し、実習内容に興味を持つ指導方法を検討すること。【方法】山梨県に在住し心肺蘇生の習得に興味を持つ児童とその両親・兄弟を一般公募し、第3回親子で学ぶ心肺蘇生講座を開催した。心肺蘇生方法に関する講義を行った後に、CPRマネキンとAEDトレーナーを用いて親子で行う心肺蘇生の実技練習を行った。市民講座終了後に、児童へ興味を持ったことについて、指導者へ効果的であった指導方法について調査した。【結果】参加した計45名中、児童は28名。内訳は未満児2名、幼稚園7名、小学校低学年8名、小学校高学年11名。アンケートに回答した19名の児童は、講義で心肺蘇生トレーニングボックスを使ったこと(8名 42%)、実技練習でAEDトレーナーを使ったこと(13名 68%)、CPRマネキンを使ったこと(8名 42%)に興味を示した。指導者は、1)学校授業のように机に向かい、講義時間を30分程度にすること、2)アニメーション動画を用いて難解な医学用語を用いないことで、児童が集中して講義内容を習得することができたと回答した。【考察】児童は、学校で行われている授業形態をとることで、講義内容に集中できた。講義は映像を用いてわかりやすく解説したこと、実技練習は数多くの心肺蘇生練習道具に触れる時間を十分とったことが児童の興味を引き付けた。このような指導方法は、児童へ心肺蘇生を指導するために有効であると考えられた。

8:30 AM - 9:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2)

[III-TRO5-04] 循環器系混合病棟の小児患者を受け持つ看護師の抱える不安

○石井 里美, 大久保 三和子, 石井 真寿美 (千葉県循環器病センター 看護局)

Keywords: 小児循環器, 看護師, 不安

【背景】循環器系の混合病棟では、小児患者を受け持つ際不安や苦手意識が多く聞かれる。【目的】混合病棟で小児患者を受け持つ看護師が抱える不安とそれに対する対処方法を明らかにする。【方法】循環器系混合病棟に勤務する看護師を対象に小児患者を受け持つ際に抱える不安と対処に関する半構成面接と看護師経験等に関する質問紙調査。当該施設の倫理審査委員会の承認を得た。【結果】対象看護師は9名、看護師経験年数は1~19年、当該病棟の経験は1~4年だった。混合病棟で小児患者を受け持つ看護師が抱える不安は、18のカテゴリーと83のサブカテゴリー、対処は13のカテゴリーと30のサブカテゴリーが抽出された。不安のカテゴリ

リーは、＜経験する機会の少なさ＞＜頼れるスタッフの少なさ＞など学習や教育方法に関すること、＜ケアのタイミングを決める難しさ＞＜小児特有の観察への不安・難しさ＞＜成長・発達に合わせた関わりへの困難感＞など小児の観察・処置に関すること、＜病態理解の難しさ＞＜略語が多く分かりにくい＞＜急変や処置への不安＞など循環器特有の難しさの他、＜育児方法・関わり方が分からない＞＜担当が続くことへの負担感＞＜親との関わりへの困難感＞が挙げられた。対処のカテゴリーは＜経験のあるスタッフへの相談＞＜自己学習＞＜育児や疾患の経験を生かす＞＜文献・手順をみる＞＜処置は経験者と一緒に行う＞＜サポート体制の整備＞＜（経験の少ない処置は）出来ないと意思表示が必要＞＜医師からの病態・治療の説明＞などが挙げられた。【考察・結論】総合病院の看護師は異動により経験のある看護師が減ったり、小児看護のモチベーションが高くないなどの場合があり、病棟にあった教育方法の見直しが必要と言われている。スタッフ間の情報交換の重要性や他職種との連携、急変時の対応の強化、日々の受け持ちやサポート体制の具体化、教育の見直しを行う必要性が示唆された。

8:30 AM - 9:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 8:30 AM - 9:20 AM ROOM 2)

[III-TRO5-05] 小児循環器看護における継続教育への一考察 —新人研修においてペーパーペイシェント型シナリオトレーニングを実施して—

○笹川 みちる, 松室 有希 (国立循環器病研究センター 看護部)

Keywords: 小児循環器看護, 継続教育, シナリオトレーニング

【目的】小児循環器看護は多様な看護実践能力が求められるが効果的な継続教育方法についての先行研究は少ない。今回、循環器専門 A病院の新人研修で実施したシナリオトレーニングを振り返り、教育方法について示唆を得たため報告する。発表は当該看護部の許可を得た。

【研修の実際】看護実践の基礎である看護過程を臨床現場で展開する力を養うことを目的に企画した。シナリオは4場面で作成し、1) 未手術 VSDの1歳児が感染契機に有症状となり入院、2) 2日目に自宅で確実な与薬ができていなかったなどの家族の知識不足や手術に対する不安が顕在化、3) 4日目午前には症状改善し活気が戻ったことで自己抜去などのリスクが増加、4) 4日目午後に食欲が回復した児に家族が制限を超えて水分を与え病状悪化、とした。演習は、場面1) の情報から関連図を作成、抽出した問題点から看護計画を立案し、その後の追加提示された場面の情報で、計画を評価・修正する方法とした。

【結果】肺血流増加の病態をベースに患者の個別性を書き加える形で関連図を作成するのに時間を要したが、それらが整理されると看護計画の立案・修正は臨床現場での実際の経験と繋げてスムーズに実施できた。新人看護師の反応は「日頃の観察やケアの意味がわかった」「家族も含めてこんなに予測しなければならぬと感じた」であったが「現場ではこんなにゆっくり考える時間がない」との意見もあった。

【考察】場面を複数回展開する演習は小児循環器看護に重要なアセスメントを繰り返しながら病態を理解することへのシミュレーション学習となり、精神・社会の側面からもシナリオ作成したことは、生命維持のために身体面の重きをおきやすい循環器看護において、患者を全人的に捉える視点への学びに繋がったと考える。今後は現場の機会教育においてシナリオとの類似場面を的確に捉え、集合研修での学びを臨床現場と繋げるための更なる工夫が必要と考える。

Free Paper Oral(multiple job category) | 心理・プレパレーション

Free Paper Oral (multiple job category) 6 (III-TRO6)

Chair:Masako Aoki(Musashino University, Faculty of Nursing)

Sun. Jul 9, 2017 9:20 AM - 10:20 AM ROOM 2 (Exhibition and Event Hall Room 2)

[III-TRO6-01] 心臓移植に伴う転院における心理社会的視点での情報共有

○作田 和代 (静岡県立こども病院 成育支援室)

9:20 AM - 10:20 AM

[III-TRO6-03] 植込み型除細動器植込み手術を受ける患児に対する子ども療養支援士の役割

○割田 陽子¹, 朝海 廣子², 阿部 真奈美¹, 荒木田 昭子¹, 白神 一博², 進藤 考洋², 平田 陽一郎², 犬塚 亮², 平田 康隆³, 本田 京子¹, 岡 明² (1.東京大学医学部附属病院 看護部, 2.東京大学医学部附属病院 小児科, 3.東京大学医学部附属病院 心臓外科)

9:20 AM - 10:20 AM

[III-TRO6-04] 重症心不全患児への Child Life Specialistによる介入とその成果－補助人工心臓装着から移植、移植後の関わりを行った1症例－

○田村 まどか¹, 坂口 平馬², 福山 緑², 白石 公², 市川 肇³, 坪井 志穂^{1,4}, 堀 由美子^{1,4}, 勝原 寛子⁴, 鎌田 将星⁵, 福嶋 教偉¹ (1.国立循環器病研究センター 移植医療部, 2.国立循環器病研究センター 小児循環器科, 3.国立循環器病研究センター 小児心臓外科, 4.国立循環器病研究センター 看護部, 5.国立循環器病研究センター 脳血管リハビリテーション科)

9:20 AM - 10:20 AM

[III-TRO6-05] 循環器病棟でのファシリテッドッグの活動を看護の視点から振り返る

○加藤 水希 (静岡県立こども病院 看護部 循環器病棟)

9:20 AM - 10:20 AM

9:20 AM - 10:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 9:20 AM - 10:20 AM ROOM 2)

[III-TRO6-01] 心臓移植に伴う転院における心理社会的視点での情報共有

○作田 和代 (静岡県立こども病院 成育支援室)

Keywords: 心理社会的支援, 心臓移植, 転院

【背景】心臓移植を受ける決断をした子どもと家族は、治療の内容により転院したり、移植を行うために心臓移植実施施設または海外の施設に転院することになる。転院は環境の変化が大きく、子どもの不安・葛藤・混乱などの心理的負担を強くする恐れがある。それらの心理的負担を予防・軽減するためには、施設間での医療や看護の情報共有はもちろん、心理社会的視点での情報共有も必要となる。【目的・方法】心臓移植を受ける子どもが転院する際、心理社会的支援を行う職種である、Child Life Specialist (CLS)、Hospital Play Specialistの資格を有する保育士、子ども療養支援士、米国のCLSが連携した事例を経験した。この事例における連携を後方視的に振り返り、継続した支援のために必要な情報を整理し、子どもや家族への効果を考察した。【結果】心理社会的支援を行う職種間で情報を共有した内容は、アセスメントに基づいた、「子どもの現状認識と使っている言葉」「子どもの主体的な対処の方法」「医療者に対して・家族間で・子ども同士でのコミュニケーションの取り方」「転院の目的や今後の見通しについての本人の認識」「家族構成とそれぞれの役割」「施設間の入院環境に関する違い」であった。また、転院先から「入院オリエンテーション資料」「病棟や主に関わる人の写真」「スタッフからの肯定的なメッセージ」の提供があった。これらの情報は、子どもに関わる多職種で共有された。【考察】子どもの認識やコミュニケーション方法の情報は、子どもと医療者が継続的に共通の言語的・非言語的表現を使うことにつながり、更に対処方法が尊重されることで、子どもの主体性が守られた。また、環境が違っても迎えられている雰囲気を感じることで、子どもと家族は安心感を得て転院することができた。これらにより転院する子どもの心理的負担を軽減することは、子どもが主体的に移植に向かう一助になると示唆される。

9:20 AM - 10:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 9:20 AM - 10:20 AM ROOM 2)

[III-TRO6-03] 植込み型除細動器植込み手術を受ける患児に対する子ども療養支援士の役割

○割田 陽子¹, 朝海 廣子², 阿部 真奈美¹, 荒木田 昭子¹, 白神 一博², 進藤 考洋², 平田 陽一郎², 犬塚 亮², 平田 康隆³, 本田 京子¹, 岡 明² (1.東京大学医学部附属病院 看護部, 2.東京大学医学部附属病院 小児科, 3.東京大学医学部附属病院 心臓外科)

Keywords: 植込み型除細動器 (ICD), 子ども療養支援士 (CCS), 心理支援

【はじめに】成人の植込み型除細動器(ICD)植込み患者の精神的ケアに対する研究は多く報告されているが、小児の報告は未だ少ない。今回、不整脈による失神を起こし、ICD植込み手術を受けた患児に対し、医師の依頼を受けて不安や恐怖に対する介入を行った。その介入を振り返り、子ども療養支援士 (Child Care Staff: CCS) の役割について報告する。

【方法】ICD植込み手術を受けた2例の診療記録からCCSの介入と患児の反応を振り返り、CCSの役割について検討した。発表に関して患児家族の許可を得て行い、個人が特定されないよう配慮した。

【結果】対象は6歳と13歳の女児。2例とも転院時より環境の変化や先の見通しへの不安があり、13歳の児は失神再発の恐怖で歩行が困難になっていた。CCSの介入は『入院環境の適応』『感情表出』『病気や治療説明後の理解』『検査・手術の心の準備と達成感』『失神発作の不安』に分類された。遊びを通して感情表出を助け医療者へ代弁したり、検査・手術時は発達に応じたツールを用いて心の準備と達成感が得られるフィードバックを行った。失神発作の不安では、患児のペースで語れるようにし発作時の対処方法を一緒に考えた。この結果、6歳の児は「早くシールもらいに検査行きたい」と前向きな姿勢を示し、「手術怖かったけどできた」と達成感を表

現していた。13歳の児は「転院して何をするのかわかって良かった」と見通しが持てたことや、「たくさん話を聞いてもらったら落ち着いた」と話した後に歩行ができるようになり、さらに「麻酔の時お母さんがいれば安心できる」と手術を乗り越える方法も自ら考えられるようになった。CCSが医療者と協働して介入することで、患児らは主体的に治療に臨めるようになっていった。

【結論】 CCSは、患児が安心と信頼を持って医療者と一緒に治療に取り組めるよう、患児の立場で医療を調整する役割を担っていた。

9:20 AM - 10:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 9:20 AM - 10:20 AM ROOM 2)

[III-TRO6-04] 重症心不全患児への Child Life Specialistによる介入とその成果－補助人工心臓装着から移植、移植後の関わりを行った1症例－

○田村 まどか¹, 坂口 平馬², 福山 緑², 白石 公², 市川 肇³, 坪井 志穂^{1,4}, 堀 由美子^{1,4}, 勝原 寛子⁴, 鎌田 将星⁵, 福嶋 教偉¹ (1.国立循環器病研究センター 移植医療部, 2.国立循環器病研究センター 小児循環器科, 3.国立循環器病研究センター 小児心臓外科, 4.国立循環器病研究センター 看護部, 5.国立循環器病研究センター 脳血管リハビリテーション科)

Keywords: Child Life Specialist, 小児心臓移植, 多職種連携

【はじめに】 Child Life Specialist(CLS)は、医療環境下にある子どもや家族に心理社会的支援を提供する北米発祥の専門職である。日本においても現在約40名が活動しているが、心臓移植医療専属のCLSが活動している施設は少ない。今回、小児用の体外式補助人工心臓である Berlin Heart EXCOR(以下、EXCOR)装着による移植待機後、移植に至った患児に対するCLSの継続的な介入とその成果について報告する。事例報告をするに当たり、対象者の親権者の同意を得て倫理的配慮を行った。

【症例】6歳未満、女児、生後3か月で拡張型心筋症と診断され入退院を繰り返していたが、6度目の入院時にEXCORを装着し移植待機となった。CLSは、患児の状態が安定した装着術後約1ヶ月より医師や看護師と日々協働しながら、患児の発達年齢を考慮した遊びを通しての介入や、処置時のサポートを開始した。また、EXCORの模型を装着した人形を使用したメディカル・プレイを行い、患児の病気とその治療に対する理解を深める関わりを行った。さらに、理学療法士(PT)によるリハビリテーションの際にも、患児がより積極的に取り組めるようサポートを行った。装着術後178日目に心臓移植が施行されたが、その術前にもメディカル・プレイによって患児に手術の説明を行ない、移植後も早期からCLSは患児への介入を再開した。その後、患児は良好な経過を辿り、心臓移植後52日目に退院に至った。退院後もCLSは、患児が外来受診への移行を円滑に行えるよう、レシピエント・コーディネーターと連携して、外来受診時の流れや生活の注意点についてまとめた絵本を作成し、患児の発達年齢を考慮した介入を継続している。

【考察】CLSによる重症心不全患児への発達段階を考慮した様々な介入は、移植待機期間中から移植後においても、患児がより医療環境や医療体験、移植後の生活について理解し臨むために有用であり、そのためには多職種連携が不可欠である。

9:20 AM - 10:20 AM (Sun. Jul 9, 2017 9:20 AM - 10:20 AM ROOM 2)

[III-TRO6-05] 循環器病棟でのファシリティドッグの活動を看護の視点から振り返る

○加藤 水希（静岡県立こども病院 看護部 循環器病棟）

Keywords: ファシリティドッグ, ストレス軽減, コミュニケーション

【背景】ファシリティドッグ（以下FDと略す）とは愛情と安らぎを与えるよう専門的なトレーニングを受けた犬のことである。一つの施設に常勤し継続的なメンタルサポートをするのが最大の特徴である。当院では2010年より導入、2012年からハンドラーとともにFDのヨギが活動している。検査中児に寄り添い、処置後の安静時間を一緒に過ごす等様々な活動をしている。現在FDは国内に2頭しかおらず文献も少ない。そこで、FDの活動を看護の視点から振り返る。【目的】FDの活動がどのような効果をもたらしたのか明らかにする。【方法】20xx年に入院していた学童後期女児とヨギとの関わりを振り返る。本研究の倫理的配慮について看護部の承認を得ている。【結果】（介入前）児は先天性心疾患のため幼少からCVを留置し持続点滴を行っており、学校生活で制限があった。今回の入院では薬剤調整のため長期入院が必要とされた。児の自宅は遠方のため面会は週に2回だった。児は院内学級に通う以外に、同室児とゲームで遊び単調に過ごすことが多かった。（介入後）ヨギが病棟に来る日を心待ちにし、ヨギが訪室すると同室児や母と共に触っていた。ヨギと関わり児に笑顔が多くみられ、児、母、医療者間でヨギの事を話す機会が増えた。【考察】循環器疾患の患児は生命危機に直結したり、行動が制限される場合がある。児は入院生活の中で家族と離れる寂しさ、長期入院によるストレス、病気と向き合う不安を抱えていた。定期的にヨギが訪室し、スキンシップを図ることで安心感へとつながり、他児との交流が深まる機会となった。単調な入院生活がヨギと触れ合うことで刺激となり、入院生活や治療を頑張ろうという気持ちが高まった。さらに、ヨギを通し児、母、医療者間のコミュニケーションを図るきっかけになった。【結論】FDと関わり病気に対する不安や入院のストレスが軽減した。FDとハンドラーと協働し看護を実践することが今後の課題である。